

講演三 鞠智城の建物跡について

講演者紹介

小西 龍三郎（こにし りゅうざぶろう）

東京大学工学部建築学科卒業。九州造形短期大学教授を経て、現在、株式会社修復技術システム 代表取締役。専門は建築史。

・講演三「鞠智城の建物跡について」

小西 龍三郎（元九州造形短期大学教授）

はじめに

どうもありがとうございます。小西と申します。

私のほうからは、私の専門である建築史の立場から鞠智城の七二棟の建物と、同時代の古代山城の建物との比較を通して、鞠智城の建物の特徴ある建物のそれぞれの建設時期と、それから存続時期を明らかにすることによって、古代山城の姿というものの変異を見ていきたいと思っています。

一、鞠智城跡の建物跡

まず一つ、鞠智城における建物の配置と、文献に見える鞠智城の建物に関する記録になります。注目していたきたいのは、まず六九八年の「大宰府をして大野、基肆、鞠智の三城を繕い治めしむ」というこの記事です。それと天安二年の、八五八年、約一六〇年後ですけれども、「同城」、これは鞠智城を示していますが、「不動倉十一字火」とあります。これは、いわば火災に遭いました、不動倉が燃えました、という記録です。さらに、八七五年になりますと、ここが少し違いますが、「菊池郡倉舎」となっています。菊池郡の倉と営舎が草ぶきだつ

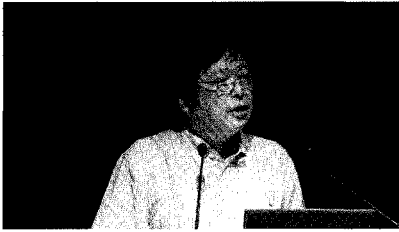


写真6 小西龍三郎氏

たのですが、カラスがその草をかみ抜いてしまいましたよ、という記録です。だいぶイメージが違ってきます。この辺を建築的にどういうふうに対応していくのかというのを見ていきたいと思っています。

こちらが、鞠智城のほぼ中央部にあります「長者原」と呼ばれるところにある七二棟の建物群です。もちろん周りには門もありますが、今回は、特にこの鞠智城の中心部にあります長者原の建物群について少し分類をしなから、解説をしていきたいと思っています。

地域としまして、真ん中は長者原、西側に少し台形の部分がありますが、こちらは小高い山になっていて、長者山といえます。それと、東側にもう少し丘陵部があります。ですから、ゾーニングとして、長者原、長者山、東山丘陵と区分しながら、説明をさせていただきたいと思っています。

まず、長者原の中央部にある建物群です。四九号と呼ばれる建物で、礎石の総柱建物になります。特に長いので、長倉と呼びます。この四九号は後程、大野城と比較ができるかと思っています。周りに一号から一〇号がありますが、すべて掘立建物になります。ここで見ていただきたいのは、一号と五号、それから三号と六号、七号と八号、九号と一〇号、これは近接していて、非常に類似する形になります。掘立柱というものは腐りますから、だいたい耐用年数が二〇年から三〇年だというふうに言われています。ですから、二つあるのは、一方が先に建って、耐用年数が過ぎたので、隣に建て替えたというふうに考えたほうがいいということで、これは一気に一〇棟建てたというのではなくて、

順次建て替わっていったというふうに見るべきであろうと考えております。

これが四九号の礎石建物です。発掘をしますと、こういう礎石、ないしは礎石の抜き穴が出てまいりました。こういう建物は、高床式建物であると考えられています。下には、掘立の側柱建物の代表として一九号を挙げておりますが、発掘しますと、柱の穴、それと柱を立てる為の周りの掘方が見えてきます。この場合、真ん中に柱がないので、土間、ないしは低い床を持った建物であるというふうに考えていただければと思います。

次に一一号から一五号を挙げていますけれども、特に注目していただきたいのが、一一号と一二号です。これは真ん中の三間×四間は礎石総柱で、周りの四周、ぐるりと巡っている所は掘立柱となり、いわば礎石と掘立柱が併用されています。また、一三号というのは、これも掘立の総柱という特徴を持っております。

こちらは東側丘陵地帯の建物群ですが、左側に、二〇、二一、二二、二三号という建物が並んでいます。並んでいるように見えますが、実は二二号と二三号は、二〇号と二二号の下層にあります。二二号と二三号が建っていて、それが壊れてから二〇号、二一号が建ちましたよということです。ですから、二棟ずつしかここに建っていないかったということが分かってきます。特に、二〇号と二一号には、礎石に火災の跡が残っています。火災の跡といいますと、最初の年表でいいました天安二年の不動倉が一一棟焼けたという記録とどういうふうに繋がっていくかも少し検証していきたいと思っています。右側のほうに八角形建物が二棟あります。北側のほうが二重の八角形、それから南側のほうが三重の八角形になります。特に二重の八角形のほうは、当初三一号という掘立の建物があったのが、三〇号という礎石建物に変わっていくという特徴があります。

二四号と二七号は掘立の建物ですが、妻側から一間外れた所に間仕切りを持ちます。鞠智城の中で間仕切りを持つ建物というのは非常に珍しく、その二四号と二七号だけになります。これがどういう意味があるのかというのも考えていきたいと思います。

次に、長者山の上に建つ礎石建物です。これは、同じ向きに建っていますから、セツト関係にある礎石総柱の建物群というふうに捉えることができると思います。ここにも、四五号を除いた、四六、四七、四八号にはやはり火災跡が残っていることから、先程の天安二年の火災との関係も見ていきたいと考えています。

最後にもう一つ、六二号と六三号を注目していただければと思います。このように六二号と六三号は直行する軸を持つ建物になります。それと、柱間ですが、ここと言う柱間が全く共通しているものというのは、一つは営舎、ないしは役所的な性格を持つ建物ではないかというふうに考えられています。総柱建物が三三棟、それから八角形建物が二棟ずつ、二期に分かれるので四棟、それから、側柱建物が二五棟になります。こういうものが、いわば鞠智城に見られる建物群であります。

二、古代の倉

これは、鞠智城と同時期に編纂された文献資料ですが、『和泉監正税帳』いずみのげんしょうぜいしやうといえます。要するに、のちの和泉国、大阪の泉南の辺りの国の、いわば会計報告と見ていただいて結構です。できたのは、七三七年で、国の名前や郡の名前、建物の用途、名称、それから建物の幅、奥行き、高さ、収納量、こういうものが詳細に記載された

ものです。これを少し見ていきたいと思います。

まず、建物の用途です。ここでは、二つの用途が書かれています。一つが不動倉、もう一つが動倉です。不動倉というのは、穀類を、国司や郡司が検封します。いわば封印をしてしまうわけですが、二度と開かないというものを不動倉といいます。それに対して、動倉というのは、動用倉とも呼びますが、これは日常の出納、出し入れをするために用意された倉であります。これは見ていきますと、不動倉のほうは規模が非常に大きくて、動倉のほうは小ぶりで、動倉は不動倉の三分の二くらいの大ささしかありません。そういう特徴があります。

この正税帳に書かれているもう一つの面白い特徴は、塞の大きさが書かれています。塞というのは何かというと、高床の倉があつて、その入り口の部分に仕切りがあります。この仕切りの板を上げ下げすることによって、バラ積みの稲穀をどんどん積み上げていき、また一定の高さになったら、また板をさして、積んで行つて、最後まで積み上げるのですが、要は、バラ積みの倉庫です。これは、非常にたくさんの稲穀を収納することができまう。これに対して、この塞がないということかと言いますと、稲の穂首のところを刈りまして、それを束にして、保存するというやり方になります。これはもう伝統的な収蔵の方法だったのですが、そういうふう束にして収蔵していたものが、いわば稲穀として、もみ殻として収納するという違いが出てまいります。正税帳では、額倉が二〇棟あるのに対して、一一棟が穀倉になります。

次に、倉の名前です。甲倉、丸木倉、板倉、法倉、屋と、全部で五つの名称が出てまいります。「甲倉」というのは、よく皆さんがご存知の東大寺の正倉院に見られるような、校倉造の建物のことを甲倉と呼んでいます。

それから、「丸木倉」、これはよく聞く、ログハウスでできた、丸木でできた倉になります。次に「板倉」、これは横長の厚板を、壁、柱の縦溝に落とし込みまして、壁を造るという、横はめ方式の高床倉です。これは甲倉のあとに開発された収納量の多い倉になります。甲倉の外見ですと、だいたい桁が六メートルくらいしかできないのですが、板倉になりますと、いくらでも継ぎ足して長さが取れますから、容量の大きい倉が造れるようになります。次に、「屋」ですけれども、これは側柱のみで、土間か低床の建物です。この場合は、幅と奥行き比が二を超えるものが非常に多いということになっています。そして最後に、「法倉」。これは、板倉の一種で、非常に奥行きと幅の比が大きい、三を超えるようなものです。これは「長倉」というふうにも呼んでおります。こういうものが名前として残っているわけです。

続きまして、同じような会計報告ですけれども、越中国の交替帳と呼ばれるものがあります。これもやはり同じようなことが記載されています。だいたい一〇世紀初頭の記録ではないかというふうに考えられています。先程の和泉監正税帳に比べて何が違うかと申しますと、丸木倉が消えてしまっています。それから、法倉、先程言った細長い長倉も消えてしまっています。それから屋です。依然として使用されていますが、床面積の平均が、和泉監正税帳が約三〇平方メートルだったのが、越中国交替帳は、約六〇平方メートルと倍増します。すなわち、大規模な倉が増えたわけです。構造的に言くと、校倉が減って、板倉が増えたという特徴があります。

ここで示したのは、やはり鞠智城と同時期に造られた、福岡県小群市にある小郡官衙おごほうかんがです。第二期に特徴がありまして、北側に総柱建物が見え、東側の下のほうに、側柱がコの字形になったような部分、これは政庁と

言われている部分があります。そして、北西側のほうになりますか、館と呼ばれる直行する建物が何棟も並んでいる部分があります。この小郡官衙は、営舎、役所、日常的な役所と考えられており、政庁というのは、儀式の場ですが、それに正倉がつくというふうな形のもので、ここで申し上げるのは、同時代の官衙っていうものは、非常にその機能が政庁、正倉や館というもので、区分がはっきりしているところを見ていただければよいかと思います。

もう一つ、一番左の下のように、縦に細長い建物があって、下から二段目のところに横線が引いてありますが、これは間仕切り跡です。これは三期の建物跡で、だいたい八世紀中期以降に、二四号や二七号と同じような間仕切りがある建物が見えてまいります。

三、鞠智城の建物と大野城の建物

これから全体的な、もっと個々の建物の比較をしていきたいと思います。比較対象として、大野城を選んでみます。所在地の確定した朝鮮式山城は全部で六つあるわけですが、長崎県の新田城、福岡県の大野城、佐賀県の基肆城、それから熊本県の鞠智城、香川県の屋嶋城、そして大阪府の高安城があります。そのなかで、特に、六九八年に「大宰府をして大野、基肆、鞠智城の三城を繕治せしむ」という記録から見ても、この大野城、鞠智城というものが非常に近い関係のあるお城であったということが分かるわけです。その比較をしてみたいと思います。

大野城には、全体で七〇棟の建物があり、そのうち、掘立の側柱建物が二棟、掘立の総柱が二棟、それから礎石の総柱が六五棟あります。それからもう一つ、一間×一間の建物が一棟あります。

鞠智城の四九号は、礎石の総柱の長倉でありますが、これと類似するものが、大野城にはS B 六〇があります。やはり礎石の長倉で、版築基壇の上に建っているというのが特徴です。大野城のS B 六〇のほうに着目すると、その上の北の方に、実はS B 六四と六五という二つの建物があります。S B 六四というのは、掘立の側柱建物です。これには天智四年、六六五年から六七〇年の間に製作されたと言われている瓦が伴っています。大野城の創建期とほぼ同時期の瓦になります。それがその後、S B 六五という掘立の総柱建物、長倉と言われているものが建てられます。要するに、S B 六四が無くなってから、S B 六五が建ったという関係です。

さらにもう少し考えていきますと、S B 六五は掘立、S B 六〇は礎石、同じ長倉です。やはりS B 六五からS B 六〇への変遷ということが一つ自然に考えられるだろうと思います。そうしますと、そこに掘立建物は、先程いいましたように、耐久性、耐久年数が二〇年から三〇年ですので、これを当てはめていきますと、S B 六四は七世紀の後半、六六五年に非常に近い時期に建てられ、そして、それから二、三〇年経った七世紀のちょうど緒治の頃にS B 六五が建った。さらに八世紀前半に入り、S B 六〇が建つという一つの変遷を考えることができます。そうすると、鞠智城と大野城がほぼ大宰府の政情下の中で造られていった、建設されたということを考えていきますと、鞠智城の四九号も、S B 六〇と同じ時期、八世紀の前半、緒治期を想定することが可能ではないかというふうに考えられます。

同じような考え方で、今度は鞠智城の一一号と一二号を見ていききたいと思います。これと同様の建物、やはり大野城に七棟あります。そのうち、SB〇九五は、鞠智城の一一号、一二号が内側の三間×四間が礎石で、周りが掘立であるのに対して、内側の三間×五間が礎石で、周りが掘立という建物になります。規模が少し違いますけれど、よく似た建物です。これを見ていきますと、建物的には類似していますが、違いがごさいます。何かと言いますと、SB九五の方には掘立の四周の上に雨落ち溝があることです。これはどういうことかと言いますと、鞠智城のほうは、建った時は底付きで建ち、ずっと底付きで使われていたのに対して、大野城のほうは、建った時は底付きでしたが、ある時から底は撤去され、要するに高床式の三間×五間の倉庫になったという変遷を持ちます。特に、鞠智城のほうは、腐ってきた底状の部分の柱を、わざわざ礎石で修理したりしていますから、かなり存続させようという意識がはつきりしています。これに関しましては、大野城では、礎石の長倉から、それから四周に掘立を持つ礎石倉、それから、規格性の高い三間×五間の倉に変遷していったという過程がありますので、その中で捉えていきますと、掘立長倉の次は、四周が掘立の礎石倉に当たります。一一号は、四九号とほぼ続く建物ではないかというふうに考えることが可能かと思っています。

次に、二〇号から二三号の建物を見ていきましょう。先程いきましたように、二二号と二三号が、二一号の下層にありますから、二二号、二三号から、二〇号、二一号への変遷が考えられます。先に建った二二号は四間×四間の礎石建物で、二三号は、四間×六間の礎石建物ですが、桁行と梁間の柱間が非常に違います。長方形の柱も持っています。それに対して、二〇号は三間×四間の礎石建物、二一号も同じ三間×四間の礎石建物で、柱間

は八尺、約二・四メートルに統一されています。こういうことから考えていきますと、柱間が不統一な礎石建物から、柱間が統一された三間×四間の礎石建物に変遷したということが分かります。

大野城での変遷を見ていきますと、規格性の高い三間×五間の礎石総柱建物というのが、二期の最後のほうにできており、そのあと三期に、三間×四間の礎石総柱建物となっています。こういうことから見ますと、二一〇、二二号のような規格性の高い建物というのは、後ろのほうでできたのではないのかなということが少し分かってきます。もう少し詳しく見ていきますと、鞠智城の三間×四間の建物に二〇、二一、三六、五九、七二号というのがありますが、三六号から九世紀以来の高台付の土師器が出ております。また、七二号から九世紀の後半を下限とする遺物が出ております。さらに、二〇号、二二号からは火災痕跡が見つかっており、九世紀の半ば頃の「不動倉十一字火」と呼ばれる火災との関連が考えられます。そうすると、鞠智城の三間×四間の総柱建物というのは、だいたい九世紀の半ば頃を下限とする建物ではないかという想定ができるわけです。

三〇、三一、三二、三三号の八角形建物については、実は大野城に類似例がなく、日本の古代山城全体をみても、他に類似例はありません。朝鮮半島の山城である二聖山城にせいさんじょうと丸都山城がんとんじょうには類似例があります。二聖山城のほうは、九角形とか十二角形の建物も出ており、丸都山城のものは、同じ八角形と言っても、柱の並びが、鞠智城は放射状になっていくのに対して、マス目状に組まれて八角形を造っていくという点で少し違いがあります。このほか、法隆寺の夢殿難波宮の東西の八角形建物があります。これらは柱の並びが放射状の建物になります。時期的なものは、これだけの比較では分かりませんが、掘立のほうが若干礎石より前なのかなという観点から見ま

すと、この三〇号、三二号のあたりというのは、割と早い時期の建物ではないかというふうに考えることができます。

次に、鞠智城の四五、四六、四七、四八号を見てもみます。四五号というのは、七二号の上に造られていますが、七二号というのは、四間×三間の規格性の高い総柱建物になります。このことから、四五号は、七二号よりも後にできた終末期の建物ではないかというふうに今、考えています。四六、四七、四八号につきましては、火災の跡があり、四五号とは違う建物ですが、九世紀中頃辺りの火災との関連を考えることが可能かと思っています。

次に、二四号と二七号を見てみます。これは、大野城のSB八〇という事例と類似しています。SB八〇というのは、やはり側柱建物なのですが、南側から二間目のところに間仕切りがあります。間仕切った南側に炉が実是有り、営舎的な建物であろうというふうに考えてられています。それとよく類似した形を持つ、鞠智城の二四号、二七号についても、どちらかというと、営舎的な建物ではないかというふうに考えられます。先程、小郡官衙の第三期にも、妻部分に間仕切りのある建物を一棟お見せしたのですが、あれも八世紀の中期以降の建物であるということから、二四号、二七号というのも、どちらかというと、終末期に近い建物ではなかったかというところで、倉庫ではなくて営舎ではないかというふうに考えられます。

四、鞠智城の建物の建造時期と存続期間

鞠智城の出土土器の編年ですが、やはり土器の出土量というのは、その建物の時期の、人の活動量を示してい

る、というふうに、私達は考えています。例えば、建物を建てるという時は、地鎮祭があつたり、今でも完成式があつたりすると、素焼杯かわらけで何かをしたり、色々なことがありますので、そういうことを考えていくと、建設とも少し関わりのある数値かなというふうに考えています。やはり七世紀の第3四半世紀に、その前期に比べると倍増した出土がございますし、七世紀の第4四半期から八世紀の第1四半期にかけては、すごい量の須恵器が出ています。そして、八世紀の第2、第3四半期には空白、いわばあまり人の活動が盛んでない時期、要するに建設がほとんどなかったのではないかなと思われる時期があります。それに対して、また八世紀第4四半期になると、再度、須恵器が出土してきます。やはり何か建設的なことが行なわれたというふうに考えています。また、九世紀に入りまして、第1四半期、第2四半期はないのですが、第三というのは、先程いいましたように、鞠智城の不動倉一一倉が燃えた時期です。その時期に合わせた後に、今度は須恵器ではなく、土師器のピークがもう一度来ます。ということは、これはもう一回建設が行われたのではないかなという意味ですけれども、要するにもう須恵器ではなくて、土師器に変わってきています。私は建築の主体が変わったのではないのかな、というふうに考えております。そういうことから見ると、先程、ご説明した「菊池郡倉舎」に関する記録は、このあたりで菊池郡のものと変わり、そういう機能に変化を生じさせながら存続したのではないかなと考えられるわけです。それで、建築の各期を五期に分けています。まずは、創建期です。これが七世紀の第3四半期頃。それから、緒治期、これが第4四半期から八世紀の第1四半期。それから空白期というのを設けています。おそらく何もできなかった時期です。それからさらに八世紀の第4四半期に建築の再開が始まります。そして九世紀、もう少し

時間があれば二つの時期に分けたのですが、九世紀の第一、第二あたりは何もないのですが、第三あたりです。中期以降に今度は新しい形の建物となりますが、私は菊池郡の倉舎としての建物ができたのではないかと、いうふうに考えています。

これを少し細かく見ていきます。まずは、創建期です。創建期をどういうふうに考えているかといいますと、まず長者原の中心部に、屋と呼ばれる側柱の倉庫群が建てられ、また、東丘陵と長者山に掘立の総柱の建物が建てられたという形になります。私は、その長者原の北にある一五号について、少し性格が違うのではないかなというふうには考えていますが、こういうふうな建物がまず建てられました。全て掘立建物で、緊急性が求められた築城が行なわれた時期ではないかというふうに考えています。

次に、繕治期です。ここでは、まず長者原の掘立建物の建て替えが行なわれています。そして、四九号といわれる礎石の長倉が建ちました。東側丘陵には、二二号、二三号の規則性を持たない礎石建物が建ち、さらに、その建物の東側には、八角形建物が建設されました。さらに、その北側には、営舎的な建物、六二号、六三号ですね。いわば役所のような機能を持った建物も、この時期に建設されたのではないかと考えています。これをまとめますと、まずは耐用年数を超えた創建期の掘立建物の建て替えが行なわれるとともに、もう一つはさらに強い律令制という意識の中で、本格的な整備が行なわれた時期ではないかというふうに考えられます。

次に、八世紀第4四半期の再開期です。要するに、もう繕治期からもう一〇〇年近く経っていますので、建て替えが行なわれたものと思われれます。要するに、それも東アジアの情勢が緊急性を帯びた為に建て替えが行われ

たという状況であります。

最後に、終末期です。二〇号、二一号、それから長者山の礎石群が火災で焼けた後に建ったのは、礎石建物はわずかに二棟のみで、あとはどちらかというと、側柱建物が中心となった建物群が建ったということになります。鞠智城としての機能は終了しまして、郡倉舎的な建物としての機能に変化した時期ではないかというふうに捉えております。

以上、鞠智城を通じて、大野城も含めまして、こういうふうな変遷が行なわれたというお話でした。どうもありがとうございます。